

生産者が求める農場経営・生産獣医療に関する 実践的な知識を持った管理獣医師の育成

【講演要旨】

日本の養牛頭数は長らく減少が続いていたが、2016年から2017年を境に近年は再び増加傾向にある。増加に転じた主要因とされているのは「小～中規模農家の離農」を越える「大規模農家のさらなる大規模化」である。大規模農場(*)が飼養する牛の頭数および全体に占める割合は、2008年と比べて2020年時点において乳用牛では42.3万頭(27.6%)から60.1万頭(44.5%)へ、肉用牛では146.9万頭(50.8%)から147.9万頭(57.9%)へそれぞれ増加している。その結果、農家1戸当たりの平均飼養頭数は乳用牛で1.56倍(62.8→98.3頭/戸)、肉用牛で1.72倍(35.9→61.9頭/戸)と大きく増加している(1)。

1戸当たり飼養頭数の増加に伴い、これまでの「人の目に頼る管理」では多くの牛に目が行き届かなくなる結果、牛の健康や発育および乳質・肉質の維持が困難となるケースは珍しくない。よって、規模拡大を目指す多くの農場では、過去の管理手法にとらわれない「新たな管理体制の構築」が求められる。特に、IoT機器やセンサーを利用した新たな機械およびデータ管理機器を導入する際は、その新しい機械に合わせた管理体制を構築することが求められる。

一方、このような農場をサポートする農場外部関係者の体制は必ずしも十分とは言えない。導入する機器や資材のサポートを手厚く実施できるメーカーは多いが、大規模化に伴う現場での諸問題やリスク(感染症の侵入・飼料原料の不足や供給不安定・農場内外の人的リソース不足、など)を広く理解・予測し、そのリスクを最小限に抑えられる技術者や獣医師は不足している。これは視点を変えると、これまで獣医師に求められていなかった農場側の新たなニーズが発生していると捉えることができる。すなわち「産業動物獣医師の新たな職域」や「産業動物獣医師の新しい働き方」が生まれていることを意味する。その獣医師像の一つが、「農場管理獣医師」である。農場管理獣医師が担うべき役割や期待される業務範囲は過去に比べ確実に広く・深くなっており、食の安全と農場の利益を守る「農場の門番」としての責務は大きい。

今回のセミナーでは、農場管理獣医師の果たすべき役割や実践的内容を実際の事例も交えながら紹介する。また、今後ますます需要が増してくるであろう農場管理獣医師をどの様に育成していくかについて、弊社の取り組みと今後の課題を皆様と共有したい。

参考文献 (1) 農林水産省 畜産統計

* 大規模農場：乳用牛は成畜100頭以上、肉用牛では総頭数200頭以上とした



【略歴】

- 1983年 大阪府生まれ
- 2009年3月 北海道大学 獣医学部 卒業
- 2009年4月～ 有限会社シェパード (鹿児島県) にて肉用牛の個体診療や農場コンサルティング業務に従事
- 2013年9月 農場HACCP審査員 資格取得
- 2014年4月～ 北海道大学 大学院獣医学研究科にて研究に従事 (文部科学省リーディング大学院奨学生/日本学術振興会特別研究員：DC1)
- 2015年8月～ サツラク農業協同組合 (札幌市) 乳牛の個体診療や人工授精・受精卵移植業務に従事
- 2017年5月～(現在) 株式会社BRAST (札幌市)

乳肉両方の農場コンサルティング・予防獣医療の推進・飼料設計・繁殖検診を行う。
農場のIT化/デジタル化をサポートし、農場ごとにデータ活用方法の構築を推進する。